

令和 5 年 6 月 18 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04402

研究課題名（和文）潜在的指標と自記式尺度を組み合わせた依存物質再使用リスク測度の改良及び治療応用

研究課題名（英文）Improvement of substance dependence relapse risk scale with implicit attitude measurement and application to treatment with self-reported scale

研究代表者

大谷 保和（Ogai, Yasukazu）

筑波大学・医学医療系・助教

研究者番号：10399470

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：アルコール飲酒可能な健常成人68名を対象に縦断調査を行った。潜在連合テスト（Implicit Association Test：IAT）を用いてアルコールへの選好度、および自記式尺度を用いた再飲酒リスクや飲酒渴望感を測定した上で、報酬としてのアルコールの選択可能性や測定後1週間の飲酒日数との関連を検討した。結果、IATでのアルコール選好度、再飲酒リスクおよび飲酒渴望感の高さが、報酬としてのアルコール選択や測定後の飲酒日数の多さと有意に関連していたものの、効果は限定的であった。また今回の健常群データでのIATスコアは、別研究の臨床群データのうち再飲酒群と比較して、有意に低くなっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

潜在的態度測定によるアルコールへの選好度は、臨床群だけでなく健常成人群でも、その後の飲酒日数を予測するが、VASによる飲酒渴望感など自記式尺度のほうが予測力が高いことが明らかになり、臨床群の結果との比較により、IATによるアルコール選好度は、主観的なアルコールへの選好を表出しにくい状況でより効果的に活用できる可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：A longitudinal study of 68 healthy adults with alcohol drinking habits was conducted. We measured preference for alcohol using the Implicit Association Test (IAT) and relapse risk of drinking and craving for alcohol using a Self-rated Scale, and then examined the association with the likelihood of choosing alcohol as a reward and the number of drinking days in a week after the measurement. Results showed that higher alcohol preference on the IAT, relapse risk of drinking, and craving for drinking were significantly associated with higher choice of alcohol as a reward and more days of drinking after the measurement although the effect was limited compared to the clinical sample. IAT scores in the current healthy group data were also significantly lower than those in the alcohol-dependence clinical data with relapse.

研究分野：臨床心理学

キーワード：依存症 再使用リスク 潜在的態度

1. 研究開始当初の背景

わが国における薬物乱用・依存は長期拡大傾向にあり、特に若年層への浸透が深刻化している。また受刑者の約 3 割が覚醒剤取締法違反者で占められるなど、重篤な社会問題を引き起こしている疾患でもある。加えて最もポピュラーな依存物質であるアルコールも、依存症推定罹患患者数はおよそ 80 万人と言われており、代表的な精神疾患の一つであり続けている。しかしながらわが国の依存症臨床研究は萌芽段階にあり、診断および評価は医師個別の判断に任せられ、客観的な評価システムが存在していなかった。そこで研究代表者(及び研究協力者)は依存症重症度を評価する構造化面接である嗜癮重症度指標(Addiction Severity Index; ASI: Senoo et al, 2006)、依存物質再使用リスクを評価する刺激薬物再使用リスク評価尺度(Stimulants Relapse Risk Scale; SRRS: Ogai et al, 2007)・アルコール再飲酒リスク評価尺度(Alcohol Relapse Risk Scale; ARRS: Ogai et al, 2009)を開発・標準化し、これら評価システムの依存症臨床現場への適応拡大を着実に進めてきた。

今後さらに依存症臨床研究を推し進めるためには、上記評価システムによる再使用予測精度を高めたいうえで、評価システムを治療改善に生かすことが不可欠であるが、以下の問題が残存している。

依存症は再発率の高さが大きな問題だが、依存症者は自らの問題を否認する/隠す傾向が強く、依存物質再使用につながる渴望感やリスク認知を必ずしも正直に表明しない。特に薬物事犯者においては、自己報告式の尺度への回答の信頼性を確保するのは容易ではない。一般的な社会的望ましさ尺度・病識項目による対応には限界があり(Ogai et al., 2007)、物質依存症者特有の反応バイアスの影響を受けにくい手法を用いた潜在的な依存物質選好度を測定するシステムの開発が求められている。海外では社会認知的手法を応用して依存症者の再使用予測精度を高めるための試みが近年特に盛んであるが(一例として Wires & Stacy, 2006)、日本において同様の研究はほぼ存在しない。

研究代表者は上記に着目した研究に取り組み、社会認知的手法を応用したアルコールへの潜在的な選好度を反応時間によって測定する測度を開発、そのスコアによりアルコール依存症入院患者の退院後再飲酒が予測可能であることを見出した(平成 23-25 年文科省科研費基盤 C)。今後研究を更に進めてゆくために、開発した潜在測度が物質依存症者の再飲酒の予測にとどまらず、依存物質を習慣使用する健常成人の飲酒行動も予測しうるか、その予測妥当性および幅広い対象への適用可能性を検討することが重要となる。

2. 研究の目的

本研究では、物質依存症の効果的な治療介入法の開発を最終的に目指し、以下の 2 点について検討を行うことを目的とする。

(1) 潜在的な依存物質選好度の予測妥当性の検討：健常成人への適応

潜在的な態度測定的手法(潜在連合テスト(Implicit Association Test: IAT): Figure1 参照)を応用した、アルコールへの潜在的な選好を測定するための測度を用いて、危険飲酒リスク・渴望感など他の変数との関連を通じ、測度の妥当性・信頼性を検討する。

具体的には、アルコール飲酒習慣のある健常成人の初回調査時の依存物質への潜在的な選好が、調査 1 週間後の飲酒状況や参加報酬としてのアルコール選択可能性をどの程度予測するのか検討する縦断調査を行う。最終的には、従来の自己報告式再発リスク尺度や主観的渴望感と潜在的な依存物質への選好度を組み合わせ、物質依存症の総合的な再発リスク測定のための評価系を構築する。

(2) 依存症評価系の普及および応用

今まで開発してきた依存症評価系のさらなる臨床現場への普及・応用を図ってゆく。

3. 研究の方法

(1) 潜在的な依存物質選好度の予測妥当性の検討：健常成人への適応

測度の開発と改良：依存物質への潜在的な選好度を測定する手法としては、潜在的な態度を測定する際最も安定した結果を出すことに定評のある潜在連合テスト(IAT)(Greenwald, 1992)を用いた。IAT は PC 画面上に出現した刺激をキー押しでカテゴリ分類する課題である。刺激の種類に複数の概念を用意し(花 - 虫、快 - 不快等)、概念同士の組み合わせによるキー押し反応時間差を計測することで、概念間の連合強度を測定するものである(例：花と快を同一カテゴリに分類する反応時間よりも、花と不快の分類反応時間の方が長いほど、花と快という概念の結びつきが強いと判断する)。依存症においては、依存物質(アルコール - ソーダなど)とそれへの態度(快 - 不快、接近

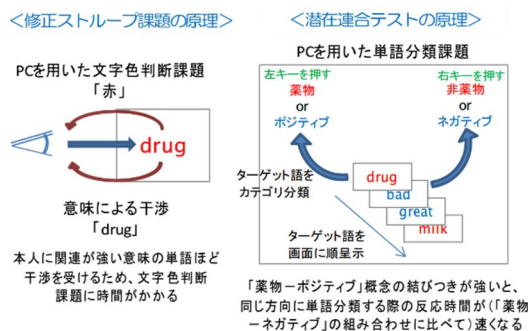


Figure 1 潜在的な態度測定法の例

- 回避など)の2つの概念の連合が検討されることが多い。

本研究では依存症への応用研究でも最も用いられることの多かった組み合わせであるアルコール(お茶) - 快(不快) IATを用いた(Figure 2)。アルコール・お茶の刺激は写真をそれぞれ5種類、快・不快刺激はHouben(2010)も参考にアルコールに関連した快・不快語を5語ずつ選択した(快語:きもちよい・たのしい・うれしい・おいしい・うまい、不快語:きもちわるい・つまらない・かなしい・おいしくない・まずい)。また実際のプログラムはInquisit 4.0 (Millisecond Software)により開発した。完成したプログラムは5名の対象(研究者・臨床心理士等の専門家・大学院生)に試行し、刺激の種類や画面レイアウト・教示内容等についてフィードバックを受け、それに基づいてプログラム内容の修正を行った。

事前準備:研究実施にあたって筑波大学の学際系倫理委員会による承認を受けた。

対象:法的に飲酒可能な年齢に達した健常者のうち、研究参加への自発的な同意が得られた者。なお、飲酒を禁じられている者・飲酒により悪化する可能性のある疾患(肝障害など)に罹患している者は除外した。

リサーチ会社(クロス・マーケティング社)に登録しているモニターに研究実施を依頼した。94名が初回調査にエントリーした。エントリーにあたって、モニターの飲酒頻度質問への回答によって高頻度飲酒群と低頻度飲酒群のバランスを取った。具体的には、アルコールの飲酒頻度への質問のうち、「飲まない」から「1ヶ月に2-4回飲む」と回答したグループを飲酒頻度低群(44名)、「1週間に2-3回飲む」から「毎日飲む」と回答した者を飲酒頻度高群(50名)とした。うち68名(平均年齢(SD)=46.3(14.1)歳、男性/女性=37/31名)が初回調査1週間後のフォローアップ調査まで終了したため、この68名を解析に用いた。

手続き:調査はWeb上で回答および潜在態度測定 of 双方を実施可能なように構成した。具体的には以下の2つである。初回調査:対象者に、基本属性(年齢・性別・飲酒開始年齢・現在の因習習慣)、アルコールへの主観的渴望感、依存症重症度、飲酒リスク、直近のストレス状況、IATによるアルコールへの選好度を測定した。合わせて調査の最後に、仮の選択報酬としてアルコールを選択する可能性について測定した。フォローアップ調査:初回調査後1週間後に初回調査から1週間の間の飲酒状況を調査した。

測定:潜在的なアルコール選好度:アルコール(お茶) - 快(不快) IATを用いた。測定後、Greenwald, Nosek, Banaji(2003)に従いD得点を算出した。得点が高いほど、アルコールと快概念の連合が強いことを示す。アルコールへの渴望感: Visual Analogue Scale (VAS)を用い、ここ2週間で最大のアルコール欲しさを1-10の間で評定させた。飲酒リスク: Ogai et al.(2009)の再飲酒リスク尺度(Alcohol Relapse Risk Scale, 25項目, 5件法)を、必要に応じて表現を変更(再飲酒・飲酒とするなど)して用いた。「刺激脆弱性」「感情面の問題」「衝動性」「飲酒期待」「酒害認識不足」の5下位尺度から構成される。飲酒関連プロフィール: 飲酒開始年齢、現在の飲酒習慣を尋ねると同時に、依存症重症度を測定するためにAUDIT (Alcohol Use Disorders Identification Test: 廣, 2000)を用いた。併せて現在受けているストレス、性別・年齢等について尋ねた。アウトカムとしての飲酒関連行動: アウトカムとして2種類の飲酒関連行動を測定した。(a)アルコール報酬選択: 初回調査の最後に、仮の実験報酬として1500円分のドリンク(アルコールかお茶から選択)がもらえるとした場合、どのくらいの金額分を「アルコール」に使うか回答を求めた(実際にはこのような報酬が与えられることはなく、研究参加者は調査会社から別途報酬を得ており、これはあくまで仮の質問であることを参加者には伝えている)。質問は7択用意した(0円、300円、600円、750円、900円、1200円、1500円分お酒に使う(残りをお茶に使う))。(b)初回調査後1週間の飲酒状況: 初回調査後1週間のうち、何日飲酒したか(0-7日)について回答を求めた。初回調査・フォローアップ調査とも、質問への回答については全てクロス・マーケティングのWeb調査システムを用いた。また初回調査のうちIATの測定のみ、調査システムからリンクを辿れるようにしてIAT Webを用いた。初回調査、IAT測定、フォローアップ調査の紐づけをするため、参加に当たって新たなIDを付与し、各調査の回答前にIDの入力を都度求めた。

(2) 依存症評価系の普及および応用

今までに開発した依存症評価系について、尺度をホームページ上で無料公開した上で、使用について各施設から問い合わせが来た際には得点算出法や適切な使用法を個別にレクチャーした。また必要に応じて施設に直接研修に出向いた。

4. 研究成果

(1) 潜在的な依存物質選好度の予測妥当性の検討: 健常成人への適応

潜在的な依存物質選好度と飲酒関連行動との関連: IAT-D得点とアウトカムとして想定した飲酒関連行動との間には、双方ともに正の有意な相関が認められた。具体的には、初回調査からの飲酒日数との相関係数は.295($p < .01$)、報酬としてのアルコール選択との相関係数は.365($p < .01$)

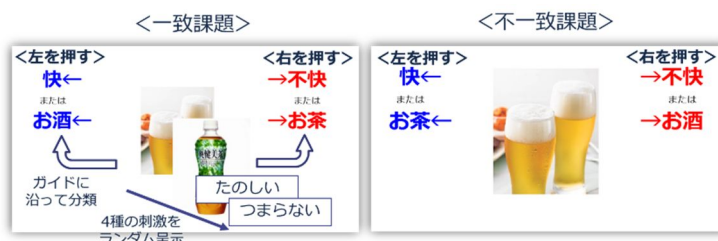


Figure 2 本研究で使用した IAT

であった。これは IAT でアルコールへの選好度が高まると、1 週間後の飲酒日数が多くなり、報酬としてよりアルコールに偏った選択を行うことを示している。一方、他の自記式尺度と飲酒日数・アルコール報酬選択との関連を検討したところ、飲酒日数・アルコール報酬選択の双方が、AUDIT による依存症重症度（飲酒日数：.517, $p < .01$ ；報酬選択 .460, $p < .01$, 以下同様）通算飲酒日数（.396, $p < .01$ ；.320, $p < .01$ ）VAS による飲酒渴望感（.605, $p < .01$ ；.624, $p < .01$ ）との間に有意な正の相関を示した。また ARRS により測定した飲酒リスク尺度においても、刺激脆弱性（.503, $p < .01$ ；.463, $p < .01$ ）ARRS 総合得点（.349, $p < .01$ ；.268, $p < .01$ ）をはじめとして幅広い下位尺度と両アウトカムとの間に有意な相関が認められた。なお、性別・年齢・現在感じているストレスと両アウトカムの有意な相関はいずれも認められなかった。

上記の結果を踏まえて、測定後 1 週間の飲酒日数とアルコール報酬選択をそれぞれ目的変数、IAT-D 得点、AUDIT による依存症重症度、通算飲酒年数、VAS による飲酒渴望感、ARRS の各下位尺度、ストレス状況を説明変数として投入したステップワイズ法による重回帰分析を実施した。結果、測定後 1 週間の飲酒日数においては、VAS による飲酒渴望感（ $\beta = .393$ ）AUDIT による依存症重症度（ $\beta = .264$ ）通算飲酒年数（ $\beta = .207$ ）の 3 つの変数のみが最終モデルとして採択され（ $R^2 = .464$ ）これら自記式で測定された変数を統制した際の IAT の効果は消失した。一方アルコール報酬選択については、VAS による飲酒渴望感（ $\beta = .566$ ）IAT によるアルコールへの選好度（ $\beta = .204$ ）の 2 つの変数が最終モデルとして採択された（ $R^2 = .428$ ）。結果として、アルコール報酬選択への IAT の有意な効果は一部で残ったものの、飲酒渴望感など自記式尺度の一部の方が両アウトカムへ高い影響力を持つことも明らかになった。

結果として、IAT によるアルコールへの選好度は臨床群と同様、健常群の飲酒関連行動（初回調査後 1 週間の飲酒日数、アルコール報酬選択）とも関連していることが明らかになり、潜在的態度測定の手法が健常成人のリスク飲酒予測に効果を持つ可能性が示された。同時に、飲酒渴望感・飲酒リスク・依存症重症度などの自記式尺度とも今回の両アウトカムは幅広く関連しており、この点は臨床群と違う傾向（一部の自記式尺度のみ再飲酒と関連）を示した。また重回帰分析を行うと、IAT の効果はアルコール報酬選択でしか認められないなど限定的になり、むしろ VAS による飲酒渴望感のような自記式尺度の方が両アウトカムと相対的に強い関連を示していた。このような結果となった理由として、各サンプルの特徴による可能性が考えられた。つまり、健常群では飲酒欲求を抑制する必要がないため、主観的な渴望感が直接に飲酒関連行動と関連するが、臨床群では、飲酒欲求の表出を抑制しなければならない状況であることが多いため、相対的に IAT のような潜在的態度測定が飲酒行動と関連するというものである。以上より、IAT によるアルコール選好度は、特に主観的なアルコールへの選好を表出できない状況（入院状況・受刑状況・通院初期の状況など）でより効果的に活用できる可能性が示唆された。

健常群と臨床群の IAT-D スコアの比較：今回の調査で実施した健常成人 68 名を対象にした IAT によるアルコールへの選好度のレベルが、以前調査した臨床群（アルコール依存症入院患者）55 名とどのように違うのか検討するために、 t 検定を実施した。その結果、健常成人の IAT スコア平均は -0.072 （ $SD = 0.65$ ）アルコール依存症入院患者の IAT スコア平均は $.274$ （ $SD = 0.94$ ）であり、両群に有意な差は認められなかった（ $t(122) = 1.34, n.s.$ ）。一方、現時点のアルコール飲酒状況を反映させるために、健常成人群をその飲酒頻度から飲酒頻度低群（フォローアップまでの回答者 35 名）飲酒頻度高群（フォローアップまでの回答者 33 名）に分け、さらに臨床群を断酒継続群（30 名）と再飲酒群（25 名）に分けた上で、4 群間の比較を分散分析及び多重比較法にて行った。結果、群の主効果は有意（ $F(3, 120) = 6.44, p < .01$ ）となり、多重比較の結果、臨床群の再飲酒群が、他の 3 群と比較して IAT-D スコアが有意に高くなっていた。

結果として、健常群と依存症臨床群において、全体では IAT によるアルコールの選好度に差はないが、各群の飲酒状況で分類すると差が認められた。これは IAD によるアルコール選好度が、その個人の安定した特性というよりも、直近の飲酒状況などの状態像を反映している可能性を示していると言える。

(2) 依存症評価系の普及および応用

刺激薬物再使用リスク尺度（SRRS）・アルコール再飲酒リスク尺度（ARRS）については海外を含む幅広い関係機関からの問い合わせへの対応を行い、各国語版尺度の作成の際には尺度の使用法や研究計画の立案等について該国の研究担当者にアドバイスをを行った。本研究課題期間においては、中国語版 SRRS の作成と標準化について台湾の研究者から申し出があり、共同研究を行い尺度の標準化作業を実施した。

また尺度応用として、東京都医学総合研究所と共同で実施している GIRK 阻害機能薬の覚醒剤依存症患者への薬効評価研究、さいたま精神医療センター所属の医師と共同で実施しているブリーフセラピーの薬物依存症患者への RCT 効果研究に、それぞれ SRRS が主要アウトカムのひとつとして採用された。共同研究者として結果のまとめに携わり、GIRK 阻害能薬の薬効評価研究については英文原著論文が刊行される運びとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 18件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Kawaida Kyoko, Yoshimoto Hisashi, Morita Nobuaki, Ogai Yasukazu, Saito Tamaki	4. 巻 254
2. 論文標題 The Prevalence of Binge Drinking and Alcohol-Related Consequences and their Relationship among Japanese College Students	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Tohoku Journal of Experimental Medicine	6. 最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1620/tjem.254.41	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浦山悠子・森田展彰・大谷保和・斎藤環	4. 巻 30(3)
2. 論文標題 地域生活中の精神障害者のセルフ・スティグマに関連する要因についての検討ー精神障害者の家族や身近なものが持つスティグマに対する捉え方を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本社会精神医学雑誌	6. 最初と最後の頁 220-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Panto Francesco, Saito Tamaki, Morita Nobuaki, Ogai Yasukazu	4. 巻 10:776
2. 論文標題 The Correlation between Enjoying Fictional Narratives and Empathy in Japanese Hikikomori	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 F1000Research	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.12688/f1000research.55398.2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Yang Wenjie, Morita Nobuaki, Ogai Yasukazu, Saito Tamaki, Hu Wenyan	4. 巻 -
2. 論文標題 Associations between sense of coherence, psychological distress, escape motivation of internet use, and internet addiction among Chinese college students: A structural equation model	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Current Psychology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s12144-021-02257-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 有野雄大・大谷保和・原田隆之	4. 巻 56(5)
2. 論文標題 日本語版BTIの作成とその因子構造および信頼性・妥当性の検証	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本アルコール・薬物医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 167-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村 照幸、森田 展彰、村杉 謙次、大谷 保和、斎藤 環、平林 直次	4. 巻 64
2. 論文標題 研究と報告 医療観察法入院処遇クライシス・プラン作成研修プログラムの開発と効果検証	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神医学	6. 最初と最後の頁 219-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1405206560	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kotajima Murakami Hiroko, Takano Ayumi, Hirakawa Shinya, Ogai Yasukazu, Funada Daisuke, Tanibuchi Yuko, Ban Eriko, Kikuchi Minako, Tachimori Hisateru, Maruo Kazushi, Kawashima Takahiro, Tomo Yui, Sasaki Tsuyoshi, Oi Hideki, Matsumoto Toshihiko, Ikeda Kazutaka	4. 巻 42
2. 論文標題 lifenprodil for the treatment of methamphetamine use disorder: An exploratory, randomized, double blind, placebo controlled trial	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Neuropsychopharmacology Reports	6. 最初と最後の頁 92-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/npr2.12232	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村照幸・森田展彰・村杉謙次・大谷保和・斎藤環・平林直次	4. 巻 29(3)
2. 論文標題 社会復帰調整官におけるクライシス・プランの活用に影響を与える要因について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本社会精神医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 194-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Wenjie Yang; Nobuaki Morita; Zhijuan Zuo; Kyoko Kawaida; Yasukazu Ogai; Tamaki Saito; Wenyan Hu	4. 巻 18(5): 2741
2. 論文標題 Maladaptive perfectionism and Internet addiction among Chinese college students: A moderated mediation model of depression and gender	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/ijerph18052748.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Kawaida, K., Saito, G., Ogai, Y., Morita, N., Saito, T., Yoshimoto, H., Takahashi, S.	4. 巻 54(2)
2. 論文標題 Prevalence of Binge Drinking and Association with Alcohol-related Consequences:A Cross-sectional Study of College Students in the Kanto Region of Japan.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Japanese journal of alcohol studies & drug dependence	6. 最初と最後の頁 62-72.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村照幸・森田展彰・村杉謙次・大谷保和・斎藤環・平林直次	4. 巻 49(3)
2. 論文標題 医療観察法病棟におけるクライシス・プランの作成と活用に関する実態調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 415-421.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kotajima-Murakami H, Takano A, Ogai Y, Tsukamoto S, Murakami M, Funada D, Tanibuchi Y, Tachimori H, Maruo K, Sasaki T, Matsumoto T, Ikeda K.	4. 巻 -
2. 論文標題 Study of effects of ifenprodil in patients with methamphetamine dependence: Protocol for an exploratory, randomized, double-blind, placebo-controlled trial.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Neuropsychopharmacology Reports.	6. 最初と最後の頁 1-10.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/npr2.12050.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kawaida K, Yoshimoto H, Goto R, Saito G, Ogai Y, Morita N, Saito T, Takahashi S.	4. 巻 246(3)
2. 論文標題 Reasons for Drinking among College Students in Japan: A Cross-Sectional Study.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Tohoku Journal of Experimental Medicine.	6. 最初と最後の頁 183-189.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1620/tjem.246.183.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kawaida K, Yoshimoto H, Goto R, Saito G, Ogai Y, Morita N, Saito T.	4. 巻 245(4)
2. 論文標題 The Use of All-You-Can-Drink System, Nomihodai, Is Associated with the Increased Alcohol Consumption among College Students: A Cross-Sectional Study in Japan.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Tohoku Journal of Experimental Medicine.	6. 最初と最後の頁 263-267.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1620/tjem.245.263.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 新田千枝・森田展彰・大谷保和・斎藤環	4. 巻 53(5)
2. 論文標題 認知機能低下を伴う高齢アルコール依存症の治療状況と課題 : 全国専門医療機関へのアンケート調査から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本アルコール・薬物医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 182-200
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 *Sugaya, N., *Ogai, Y. (*equal contribution), Aikawa, Y., Yumoto, Y., Takamaha, M., Tanaka, M., Haraguchi, A., Umeno, M., Ikeda, K.	4. 巻 38(1)
2. 論文標題 A randomized controlled study of the effect of ifenprodil on alcohol use in patients with alcohol dependence.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Neuropsychopharmacology Reports.	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/npr2.12001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梅野充・森田展彰・大谷保和・三井富美代・鳥山絵美・阿部幸枝・谷部陽子・角田三穂子・田中美歩・上岡陽江	4. 巻 52(1)
2. 論文標題 依存症家庭に対する子育て支援の現状と課題－関係者への質問紙調査の結果から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本アルコール・薬物医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 2-10.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田(道重)さおり・森田展彰・大谷保和・斎藤環	4. 巻 33(1)
2. 論文標題 官民協働刑務所におけるアルコールの問題を有する受刑者を対象とした教育プログラムの取り組みについて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アディクションと家族	6. 最初と最後の頁 58-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 0件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 大谷保和
2. 発表標題 児童虐待を受けた子どものアディクション問題と関連要因：児童虐待通告調査データを利用した分析
3. 学会等名 第40回日本思春期学会・学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊洋次郎・斎藤環・大谷保和・森田展彰
2. 発表標題 自助グループとオープンダイアローグー当事者・家族・専門家の良い対話を持つ工夫ー
3. 学会等名 2021年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大谷保和
2. 発表標題 対話により生まれるスペースの意味と役割：家庭内暴力被害者ケースからの考察 シンポジウム オープンダイアログ実践における治療的要素
3. 学会等名 第116回日本精神神経学会学術総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大谷保和
2. 発表標題 通告事例のリスク評価とそれにもとづく支援—シンポジウム：当事者のニーズに適合した支援を行うためのエビデンスに基づいた方法（EBA）と対話に基づいた方法（DBA）の統合
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第25回学術集会ひょうご大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ogai, Y., Morita, N., Saito, T., Ikeda, K.
2. 発表標題 Prediction of alcohol consumption using implicit association test to Japanese alcohol drinkers.
3. 学会等名 19th Congress of International Society for Biomedical Research on Alcoholism (ISBRA2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ogai, Y., Morita, N., Ohashi, H., Nakajima-Yamaguchi, R.
2. 発表標題 The prediction of the severity of child abuse using nationwide survey data of child guidance center in Japan.
3. 学会等名 ISPCAN XXII International Congress on Child Abuse and Neglect. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Omiya, S., Nakajima-Yamaguchi, R., Yamaoka, Y., Niwa, K., Tamai, N., Watanabe, A., Ogai, Y., Saito, T.
2. 発表標題 Paternal childcare participation and maternal abusive behavior.
3. 学会等名 ISPCAN XXII International Congress on Child Abuse and Neglect. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakajima-Yamaguchi, R., Morita, N., Yamaoka, Y., Niwa, K., Tamai, N., Watanabe, A., Taneda, A., Omiya, S., Ogai, Y., Saito, T.
2. 発表標題 Association between the difficulties of child-rearing and the use of hitting among caregivers of three-half-old in Japan.
3. 学会等名 ISPCAN XXII International Congress on Child Abuse and Neglect. (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大谷保和	4. 発行年 2020年
2. 出版社 星和書店	5. 総ページ数 10
3. 書名 物質依存症の再使用リスク評価－研究とアセスメントをつなぐ対話的視点－. 174-183. 中谷陽二・斎藤環・森田展彰・小西聖子(編)現代社会とメンタルヘルス－包摂と排除－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

平成30年度子ども・子育て支援推進調査研究事業の国庫補助協議報告書「児童相談所の実態に関する調査」 http://www.md.tsukuba.ac.jp/community-med/mental_health/h30jisou.html
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------